

実践報告

日本語初期の生徒の社会科「歴史」の授業で「主体的・対話的で深い学び」を試みる ー日本語指導が必要な中学生の初期支援コース「みらい」の実践ー

築樋博子 (豊橋市教育委員会)

1 実践の場の特徴と本実践の目的

豊橋市では、平成30年度に中学生に特化した初期支援コース「みらい」を開設した。生徒は居住区の中学校に在籍し、月曜日から木曜日までの週4日間通級して指導を受ける。指導時間は、1日5時間×週4回×10週間=計200時間である。指導者は教員であるが、母語対応の相談員が1日3時間支援に入る。「みらい」の対象生徒は来日直後で、日本語に初めて触れる生徒である。指導内容は主に「日本語、数学、英語」であり、中学校レベルの社会や理科を学ぶ段階ではない。しかし今年度から「中1ギャップ」に対応するため、小学校6年生で編入して中学に入学した、在籍年1年程度の生徒も指導の対象となった。そのため、言語の負担が大きく躓きが予測される「社会科(歴史)」の導入指導を行うことにした。

2 実践の枠組み(考え方・方法論) 先行研究

「JSLカリキュラム「社会科」(中学校編)の基本的な考え方」では、「(1)JSL生徒の「社会科」における困難の背景、(2)身に付けさせたい力、(3)教科の特性を生かした授業、(4)JSL生徒のための授業作り」が示されており、JSL社会科では、社会事象に対する見方・考え方を育む「探求型の学習」に参加するための力を育むことがねらいとされている。

3 実践の目標と計画

対象生徒は6名で、日本での社会科の学習経験は僅かにあるか、又は全くない状況である。日本語の力は、日常会話が大体わかる生徒も、生活頻出単語が多少わかる段階の生徒もいる。

	出身国	学年	実践時の 在籍年数	社会科(歴史)の学習経験	
				母国で	日本で
A	ブラジル	1年	1年	ある	あるが、わからなかった
B	ブラジル	1年	1年1ヶ月	あるが、覚えていない	あるが、わからなかった
C	ブラジル	1年	1年1ヶ月	あるが、覚えていない	ない
D	フィリピン	1年	1ヶ月	ある	ない
E	フィリピン	2年	1ヶ月	ない	ない
F	フィリピン	2年	2ヶ月	ある	ない

生徒には、社会科の特徴的な学び方のスキル、例えば「絵や写真の情報を読み取る、調べ学習、レポート作成、発表、思考ツールを使ったまとめ」等を経験させたいと考えた。また生徒は母国の学校に高学年まで在籍しており、母語の力を活かすことで新学習指導要領に示されている「対話的・主体的で深い学び」の一端に触れることができるのではと考えた。

4 実践の実際

授業では、教科の目標を「縄文時代・弥生時代の人々の生活の様子と、日本における国家形成の過程を理解する」とし、6時間計画で行った。

1時間目：歴史学習の必須語彙(～年、～世紀、紀元前、西暦、～時代など)の確認。

2時間目：教科書や母語対応の資料やICTなどを使い、縄文時代と弥生時代について調べて、母語でレポートを作成する。(時間内にできないので、残りは家庭学習。)

3時間目：各々の作成したレポートを見合い、まとめ方の良さについて話し合う。

社会科の教科用用語カルタ(自作)で、用語を反復して聴かせる活動を行う。

4時間目：(言語別グループに分れ)母語でレポートの発表、質疑応答をし合う。

発表者には「プレゼンテーションの仕方」、聴く側の生徒には「聴き方」の指導。

5時間目：在籍学級の一般的な歴史の授業のスタイルに倣い、教科書の読み(キーワードや分かる部分にマーカーを引く)、写真や絵の確認、黒板を使った授業を行う。

6時間目：学習したことを「思考ツール」を使って、日本語でまとめる。

5 結果と考察(目標の達成度・課題)

今回、全員がそれぞれ工夫してレポートを作成することができた。母語での調べ学習は、生徒の意欲を喚起し主体的な学びにつながったと感じられた。プレゼンテーションでは、生徒同士のやり取りから、学びを深めていく様子が見られた。感想には「わからないから調べて、すごく沢山学んだ。発表は緊張したけど頑張った。」「質問が沢山出されて、答えることができてよかった。」「発表前に理解度を深めるために何度も読んだ。自分だけでなく、みんなが自信を持てたと思う。」「今住んでいる国の文化がわかった。社会は今の生活をわかるために大切なので学びたい。」と記され、いずれも満足度が高かった。

最後に、「縄文時代・弥生時代の特徴」を日本語で「思考ツール」を使ってまとめた。日本語で十分表現できないところを工夫して絵で示す生徒もおり、全ての生徒が「特徴」をカテゴリ別に分類してまとめることができていた。また、母語で調べた内容を教科書で確認し直し、出来事に関連付けて国家形成の過程を日本語で記述できた生徒もいた。

「みらい」の指導は10週間で修了するため、ここでの学びの経験を在籍校での指導に繋げる必要がある。在籍校には毎週発行している「みらい通信」で、指導内容を伝えた。

【引用文献】

文部科学省(2007)『JSLカリキュラム「社会科」(中学校編)』